

地域とともに

第1号



静岡大学 地域連携協働センター
Center for Regional Collaboration



目次

■ニュースレターの刊行にあたって	2
地域連携協働センター長 柳澤 正	
■コーディネーターあいさつ	3
□地域連携で静岡大学の新しい教育・研究の創造を	
地域連携協働センター特任教授 土居 英二	
□情報を共有すること	
地域連携協働センター特任教授 満井 義政	
■地域連携協働センターを構成する組織の紹介	4
■生涯学習教育研究センターの活動について	6
生涯学習教育研究センター長 阿部 耕也	
■さまざまな地域連携のかたち	7
□地域連携は個人連携であること	
人文学部言語文化学科教授 小二田誠二	
□情報学部地域連携推進室の活動について	
情報学部地域連携推進室長 岡田 安功	
■地域向けイベントのお知らせ	11

ニュースレターの刊行にあたって

地域連携協働センター長 柳澤 正



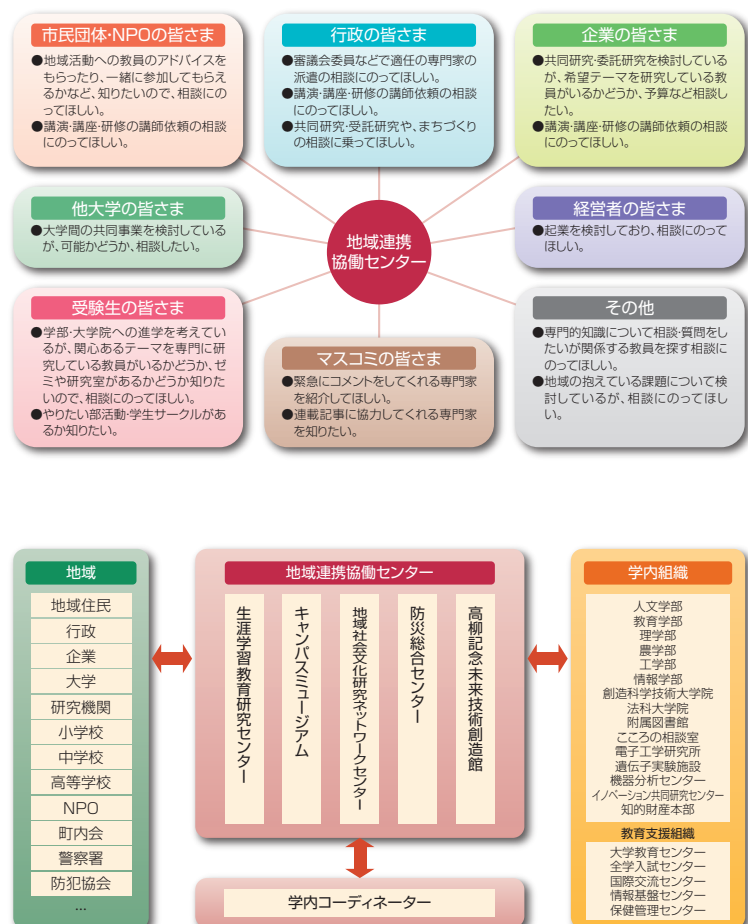
静岡大学地域連携協働センターは、静岡大学が長年培ってきた教育研究の実績をベースに、地域の皆様と静岡大学とをつなぐ総合窓口として平成20年4月に設置され、地域連携に係わりの深い大学内の5組織（生涯学習教育研究センター、キャンパスミュージアム、地域社会文化研究ネットワークセンター、防災総合センター、高柳記念未来技術創造館）を束ねる形でスタートしました。当センターが設置されるまでは、各組織がそれぞれの立場で地域との連携活動を展開してきていましたが、当センターの設置によりそれらの活動の横の繋がりが深まるとともに、大学としてより一体感をもって地域連携を推進していくことができるようになりました。

当センターの満井義政初代センター長は、まず体制作りからその取り組みを開始し、学内の様々な地域連携組織・活動の実態把握と連携の強化、さらにはキャンパス毎に特徴を有する地域連携活動の洗い出しに努めてまいりました。その結果、地域連携活動に携わる幾つかの組織の有機적繋がりが深まり、特任教授のコーディネートによる新たな地域連携活動の掘り起こしや学内の地域連携活動関係者のメーリングリストの構築など、本学における地域連携活動の顕在化が図られました。

しかし、当センターの設立から2年半が経過し、いろいろな課題も見えてきました。前述の5組織だけが静岡大学の地域連携組織というわけではなく、附属図書館やイノベーション共同研究センター、こころの相談室、各学部内の地域連携活動など実に多様な組織や活動があります。今後それらを含めて静岡大学の地域連携活動がより促進されるよう、ネットワーク化していく必要があります。また、大学全体としての地域連携に係わる企画立案の機能が十分でないこと、情報発信力が弱いこと、地域連携活動をサポートする事務組織が脆弱なこと、

地域連携活動に係わる教職員の評価が必ずしも定着していないことなど、多くの課題が挙げられます。そこで、これらの課題に対処すべく、今年7月より、全学の企画戦略会議のもとに社会連携検討ワーキンググループを立上げ、社会連携のあり方および地域連携協働センター組織のあり方、さらには当面の社会連携に関する企画立案などについての検討を開始しています。

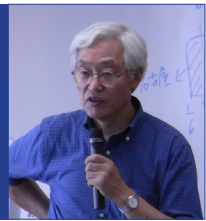
現状様々な課題があるなかで、まず静岡大学における地域連携活動の実情を皆様に知っていただきたいとの思いで本ニュースレターを発行することにいたしました。本ニュースレターの名前「地域とともに」には、静岡大学が地域と連携を深め、地域の活性化・発展に資すると共に、地域と静岡大学とが手を携えていこうという思いが込められております。静岡大学の地域連携活動の充実のために、学内外の皆様のご理解とご協力を宜しくお願い申し上げます。



〈コーディネーターあいさつ〉

地域連携で静岡大学の新しい教育・研究の創造を

地域連携協働センター特任教授 土居 英二



地域連携を通じた社会貢献は、静岡大学が掲げる教育、研究と並ぶ3つの使命の1つです。この3つはそれぞれ独立したものではなく、相互に深い関係をもっています。

学生が参加する地域の人たちとの連携・協働によるフィールドワーク教育や研究は、学生にとって、大学のキャンパスでの講義では得られない感動や勉学の動機づけをもたらし、「地域は学校、地域の人々は教師」として、生きた社会の一線で汗する方々の真剣で新鮮な息吹を、大学教育に吹き込んでくれます。

研究においても、地域社会が直面している課題は、大学にとって学会だけでは得られない新しいテーマの発見の場でもあります。現場で汗を流し、研究の素材を提供して頂ける市民、企業や行政、研究機関の方々と共同で、解決不可能な現場の問題に挑んでいると、思わぬ発見をすることがあります。地域の現実、最

高学府の教科書だと思います。

地域連携による社会貢献は、地方の国立大学にとって、単に3つの使命の1つであるだけでなく、地方の大学ならではの現場や地域の人たちとの強い絆で、首都圏の大学では得られない地域に根ざした教育や研究ができることを、誇りにしたいと思っています。



静岡空港開港に伴う、静岡市ホテル旅館協同組合との連携によるスタッフへの留学生による韓国語講座風景

〈コーディネーターあいさつ〉

情報を共有すること

地域連携協働センター特任教授 満井 義政



地域連携の活動で一番大切なことは参加する人たちができる限り多くの情報を共有することです。学生、教職員、地域関係者など異なる立場の人が、役割や技術を相互に交換しながら課題の解決と成果を生み出すために共に努力を重ねるわけですから、その目的や役割を理解しあわなければ不具合が生まれ期待する成果は得られません。

今、企業ではコミュニケーションによる社内外の相互理解が最も重要だといわれています。ネット社会では情報の伝わるスピードと領域は拡大しコストは軽減され、コミュニケーションの機会は格段に増えましたが、人とひとの意志疎通はまだ十分ではないのです。

「職場における人間関係」の調査発表があり、上司と部下の関係において納得できる指示をする、タイミングよく褒める、気配りある行動をするなどが人間関係を良好に保つ上で重要で、働く意欲を高めストレス

を少なくするとのこと。相手の状況や心情を分かろうと努めて話すことは、自らも理解され会話に深みが生まれるでしょう。

また、初めて会った人と会話をする時、その身なり、言葉遣い、話すこと聴くことのやり取りの表情などで相手を瞬時に見極め、社会的マナーを推し測り、その程度に応じて無意識に対応します。より高度なマナーを身につければ上質な会話から情報を学び、相互に深く理解しあう喜びを得ることができます。

このことを心に留めておきたいと思います。

そして、地域連携で学んだ直接的、間接的成果を、大学の教育と研究の場で活かしていくことは地域連携の使命でもあることも。

地域連携協働センターを構成する組織の紹介

生涯学習教育研究センター (<http://www.lc.shizuoka.ac.jp/>)

静岡大学生涯学習教育研究センターは、地域への大学開放と生涯学習の普及をより一層推進させるために設置され、理学部B棟1階にあります。生涯学習に関する教育や研究を行い、大学開放事業や地域連携事業などに取り組んでいます。

なかでも力を入れているのが、公開講座の実施です。静岡と浜松にキャンパスをもつ静岡大学の特徴を生かし、静岡県内の各地で開催しています。

また、静岡大学の学生向けに開設している通常の正規科目を、一般市民の方に開放する「市民開放授業」も好評です。単位の認定はありませんが、入試なし、受講資格不要、簡単な手続きで受講できます。

その他、自治体や新聞社、市民団体、NPOなどと協力しながら、さまざまなテーマで市民向けのセミナーや各種講演会を実施しています。大学キャンパスから遠く、公開講座を開催する機会も少ない場所では、

静岡大学の教員を現地に派遣して出前講演会「しずだい・飛ぶ教室」も開催しています。

開かれた大学の窓口として、自治体や市民団体、一般市民の方々に対して、生涯学習や大学開放に関する相談も行っています。講師派遣や企画のご相談がありましたら、気軽にご相談下さい。



キャンパスミュージアム (http://www.shizuoka.ac.jp/chiiki/c_museum/)

静岡大学は、1949（昭和24）年創立以来、総合大学として教育と研究に取り組んできました。大学における創造的活動がどのようにして生まれ、どのような手法で行われてきたか、そして如何に現在の大学に引き継がれてきたかを知ることは、静岡大学の先人の知恵を譲り受け、新たな活動の原点ともなります。キャンパスミュージアムは、静岡大学の知的財産である研究資料を受け継ぎ、それらを基に更に発展させる場として1996（平成8）年設立された学内共同利用施設です。世界中から集められた岩石や化石・鉱物試料、植物など生物試料、大学構内で発掘された考古学試料、大学の歴史を残す研究機器など、先人の集めた資料は貴重な財産として再利用できるものがたくさんあります。そのための研究活動拠点となります。ミュージアムの活動はこればかりではなく、特に静岡キャンパスは豊かな自然を備えたキャンパス自体を丸ごと身近な標本として、学生、教職員、一般市民に対して、自然の成り立ちを紹介する場としても利用できます。そのため現在、キャンパスミュージアムは、静岡キャンパスの生物調査を行い、自然の中で人間生活とどのように調和した空間を作り出すべきかを、訪れる市民と共に考える場を提供しようとしております。

私たち人類はいま、地球環境をも変化させるほどの影響力を持つ存在となっています。人類は、科学技術の発展や情報網の発達により、居ながらにして自然のすがたやものを画像として見ることに慣れてしています。しかし、実際のものや身近な自然に接した人の五感を通してはじめてその人の見方ができます。キャンパスミュージアムは、常設展示とともに、静岡の自然と静岡大学に籍を置いた人々の関わりを様々な視点から掘り起こし、毎年企画展を展示して、これから入ってくる学生に過去から学ぶべき資料を提供し新たな活動のきっかけになることを目指したいと考えております。



地域社会文化研究ネットワークセンター (<http://www.hss.shizuoka.ac.jp/rnc/>)

静岡大学地域社会文化研究ネットワークセンターは、人文・社会科学系スタッフの多様な地域連携を通じて社会貢献を推進するための組織です。

地域の住民・団体・企業・行政機関などの皆さんの相談・依頼窓口として、「地域の課題をともに考え」（市

場調査、子育て支援調査、政策効果分析など）、「ともに学び」（講座・研修会の開催・支援など）、大学からの情報発信（大学スタッフの地域調査・地域研究の紹介、機関誌『みんなの大学』の発行など）に取り組んでいます。どんなことでも気軽に相談下さい。

防災総合センター (<http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/sbosai/>)

防災総合センターは2年前に出来たばかりのセンターです。3つの部門（教育、研究、社会貢献・ボランティア）から構成されており、それぞれの部門が緩く結びついて活動しております。専任教員は2名ですが、各学部から併任の教員が参加しており、客員教員やサポートスタッフを合わせると17名のグループです。教育部門では、全学の新入生セミナーでの防災に関する導入や、学際科目「地震防災」を担当しております。また、来年度から「静岡大学防災マイスター制度」を始めよう準備を行っております。この制度は、防災に関する科目を然るべく履修すれば「静岡大学防災

マイスター」の称号をもらえる、という制度です。社会に出るときにこの称号を持っていると、きっと良いことがあります。

このセンターのもともとの成り立ちは、やはり東海地震対策ですが、それ以外の災害、例えば津波、火山災害、地滑り、水害などにも対応すべく、より多くの知恵を結集しようとしています。

大学で行う防災は、県や市などの自治体で行う防災とは本質的に違う、ということが大前提で、県などの防災対策などに大学としてどのように連携出来るのか、今後の方向性を模索しております。

高柳記念未来技術創造館 (<http://www.nvrc.rie.shizuoka.ac.jp/takayanagi/>)

高柳記念未来技術創造館では故高柳健次郎名誉教授の偉業をもとに、大学での学術研究が技術へ発展し、産業そして文化へと展開して社会へ還元する様子を展示しています。現在も動作する1950年代からのテレビジョンを集めた藤岡コレクションをはじめ、現在の静岡大学の最新成果や卒業生の活躍も近隣企業などの紹介とともに展示しています。また、コミュニケーションサロンとしてのラウンジもあり広く交流会などで活用されています。エコロジーを考慮した断熱構造や太陽光発電をとりいれ、名実ともに本学が地域とともに未来を創造する拠点となるよう皆様のご来館をお待ちしております。土日を含む毎日10時～午後4時まで

開館しています（月曜日休館）。小中高等学校の授業での見学や各種団体見学なども受け付けております。

なお、館内収蔵物の一部は、経済産業省の「近代化産業遺産」に認定されています。

**各機関の連絡先****■生涯学習教育研究センター**

☎ 054-238-4817

■キャンパスミュージアム

☎ 054-238-4264

■地域社会文化研究ネットワークセンター

☎ 054-238-4900

■防災総合センター

☎ 054-238-4502

■高柳記念未来技術創造館

☎ 053-478-1402

生涯学習教育研究センターの活動について

生涯学習教育研究センター長 阿部 耕也



生涯学習教育研究センターは1997年に開設され、専任教員2名、兼任の副センター長、パート事務職員1名のスタッフ構成で、学内各部局から選出された運営委員の協力を得ながら、以下のような大学開放・地域連携活動を展開しています。

＜幅広い公開講座＞

静岡大学公開講座は30年以上の歴史をもつ取り組みで、センターは開設以来企画・運営に関わり、受講者へのアンケートを行いながら市民のニーズに応えるような公開講座の運営を進めてきました。最近は座学だけでなく、健康スポーツ講座、大学の化学実験を中高生にも体験してもらう実験講座など、様々な実技・実習講座を展開しています。

＜学生とともに学ぶ市民開放授業＞

公開講座が地域社会への生涯学習サービスだとすると、大学キャンパスを生涯学習の場にしようとするのが市民開放授業です。2005年の開設以来、受講科目・受講者とも順調に増え、昨年度は400科目以上を開き、200名を超える市民の方々に参加いただきました。市民と学生が共同で地域課題に取り組むような授業も出てきています。

＜地域との連携講座＞

静岡市・富士市・吉田町などの自治体が実施する講座の共催・協力、読売新聞・中日新聞・静岡新聞等との連携講座や公開シンポジウムの企画・実施、コープしずおか・有度国際セミナーなどとの連携講座・講演会の実施など、様々な地域主体との連携講座を展開しています。

また、静岡県公民館連絡協議会、県内各地の生涯学習関連施設、養護学校などと連携・共催した研修事業や公開セミナーも継続的に実施しています。

「しずだい飛ぶ教室」は地域が企画し大学が講師を派遣する無料出前講座で、普段あまり公開講座などが実施されない地域を中心に県内十数力所で実施してきました。

＜地域との連携による調査研究＞

自治体や他大学と連携をしながら、生涯学習・まちづくりに関する以下のような調査研究を実施してきました。

・「スローライフのまちづくり」(2004年 文科学省委託生涯学習まちづくりモデル支援事業)

・全国生涯学習市町村協議会との共同研究(2004～2006年 文科学省委託生涯学習施策に関する調査研究)

・しずおか県民カレッジにおけるニーズ調査(2006年 静岡県教育委員会との共同研究)

・生涯学習センターに対する市民のニーズ調査(2009年 静岡市葵生涯学習センターとの共同研究)

＜地域と大学を「学び」を通してつなぐ＞

以上のように、生涯学習教育研究センターは「学び」を通して地域と大学をつなげ、新たな関係をつくっていくことを目指しています。地域からの積極的な働きかけをお待ちしています。



〈さまざまな地域連携のかたち〉

地域連携は個人連携であること

人文学部 小二田 誠二



20年前、静岡大学に就職するまで、私は静岡に何のゆかりもなかった。今、場合によっては「静岡の人も知らない静岡を知っている」静岡通のような扱いを受けることさえある。そのことが、大学の地域連携にどれくらい役立っているのかは分からないし、正直のところ、大学のためとか地域のためとかいう意識は極めて薄い。ただ、自分の楽しみ、好奇心によってふらふらしていることが、今のありようだと思っている。

ここはかなり自由度の高いページということなので、最初に私個人と静岡との関わりをすこし振り返っておこうと思う。

冒頭に書いたように、私は20年前、1990年4月に静岡大学人文学部に講師として採用された。その年、同僚の紹介があって長田公民館で「膝栗毛」の連続講座を持ち、翌年には怪談の話もした。しかし、公民館とのつきあいはその後ほぼ10年間ない。改めて電話がかかってきたのは2000年のことで、またしても長田公民館。当時館長だった大畑緑郎さん直々に、一九について話して欲しいと言う。前に話したことはあるが、専門外でもあり、躊躇っていると、尋常でない熱心さで口説きにかかるので、私も折れて講座を引き受けることにした。大畑さんは、一九の化身のような人だ。これが、「駿府十返舎一九研究会」の始まり。全てのことは、ここから始まった。

細かいことを書くときりがないので省略するが、これをきっかけに、ひとつは“シズオカ文化クラブ”との交流、もうひとつはあべの古書店を拠点とする“学問所”の発足である。これがやがて“アッパレ会”へ繋がり、「静岡の文化」という地域連携授業にもなっていく。

これとは別に（これも一九が絡むのだけれど）、随分前に私の授業を受けていた茶人の吉野亜湖さんが大学院に入ることになり、一九研究会メンバーでもあった茶商、葉桐清一郎さんも合流して「ALL ABOUT TEA」研究会を結成、お茶の世界にも入り込んで全学の学際科目「茶の世界」を3年間担当することにもなった。

静岡のような地方都市では、一旦ちいさな繋がりができると、そこからいくらでもネットワークが広がっ

ていく。実際「紹介したがり」も多いように思う。

“アッパレ会”というのは、“シズオカ文化クラブ”を母体として、市民が大学をもち立てよう、という目的で設立されたグループで、正式名称は「市民と静大・共同企画をすすめる会」。

出発点は、法人化による非常勤予算の大幅削減で、現在では客員教授として静岡大学とも深く関わっている平野雅彦氏を呼べなくなってしまったことなのだけれど、寄附による授業（情報意匠論）を言語文化学科で開講することになり、当時の静岡市観光協会に事務局としてバックアップしていただくために「静岡の文化」を合わせて開講することになり、やむなく私が後者を担当することになってしまった。「情報意匠論」は初年度から華々しい成果を上げ、学長表彰を二年連続で受けるなど、人文学部どころか静岡大学の名物授業になった。そこから更に“天晴れ門前塾”という学外ゼミのような組織も生まれ、現在に続いている。

一方「静岡の文化」は元々戦略もなく始めたために多くの受講生に大変な思いをさせることになったが、試行錯誤を続ける中で、最近やっと形が見えてきた気がしている。特に08年度のマッケンジー邸での聞き取り、静岡ハリストス正教会、昨年度の森田鶴堂、そして富士時計とフジ・オルゴールに関する企画などは、まさに「静岡の人の知らない静岡」の掘り起こしの重要性を改めて認識させられたし、何より関係者の皆さんに感謝される企画になったことを、嬉しく、また誇らしく思っている。今年度も授業は既に終了しているが、秋冬に向け、公開イベントや報告書作成はまだ続く。

どちらの授業も開講を急いだために、他の教員が参加しづらいものになってしまったのは大きな問題を残している。平野氏は年々多忙になっているし、私は「茶の世界」を含め、教養科目要員のようになって、私の専門を知らないままの学生も多い。実際、専門の授業まで手が回らない、というのは、外国語を多く担当している学科の同僚たちと同じ悩みである。

地域連携と専門性、という問題。学生たちは、私の“専門”について、本当に情報がない。逆に、私の専門を知っている人は、なぜ茶業を含め、地場産業の授業を多く

やっているのかいぶかしく思っているに違いない。私は全くの素人だ。

大学の地域連携として想定されるのは、農学部や工学部の技術提携や教育学部の芸術振興への関わりなど。人文学部で言えば、法律相談、行政や企業へのアドバイス、メンタルケアのサービス、といった、学問領域と密接に結びついた“地域貢献”が中心だろう。それらには、他方で、地域を対象とするフィールドワーク研究があり、例えば、考古学や歴史学は地域と密接な関わりを持って発展してきた。

そういう関わり方の困難な学問領域でも、理学部のサイエンスカフェのように、地域にとけ込んで科学の楽しさを伝えて成功している例もある。言語文化学科の場合、フィールドワーク研究としては、方言調査で多くの成果を上げてきたが、他には文学散歩や蔵書整理程度で、継続的な研究はしづらい。それでも地域貢献として、様々な外国語講座や文学講座はそれなりの集客力を持っている。

私の担当している「静岡の文化」や「茶の世界」は、こうした“専門性”とは関わりのない“地域学”で、むしろ人文学部の他学科の専門家が担当した方が良いような内容だと思っている（実際、社会学科は組織的に「フィールドワーク基礎演習」という授業を開講し、毎年立派な報告書を作成している）。

それでも私が、この授業を言語文化学科の共通科目として意味がある、と思っているのは、受講生の多くが、地域について物知りになることが目標ではない、ということ、最終的には理解してくれている実感があるからだ。これらの授業の教材は、確かに静岡にある物、静岡で暮らす人たちなのだけれど、それらについてグループで取材し、調べ、考え、まとめ、発表し、形に残す、という過程は、全ての学問の基本的な流れである。生きた教材に接することで、形の定まり、正解の見える“学問”では中々味わうことのできない喜びを知ることができる。そこが、学問の出発点になり、特定の領域について深く知ろうと思ったら、その特定の学問だけではどうしようもない広がりが必要されることもはっきり突きつけられる。

これが、大学生が地域と関わることで実感して欲しい最も大きなテーマだと思っている。それらは、もちろん、言語文化学科の学問に限ったことではないのだけれど、どんな学問領域を選択するにしても、コミュニケーションの仕組みそのものに自覚になる訓練は必要だし、他者との交流に必要な想像力は漫然とした読書だけでどうにかなるものではない。そうやって、

言語学や文学、比較文化、といった言語文化学科の学問が、自分たちが生きてゆくために確かに必要なのだ、ということに、早い内に気づいてくれることを願っている。

今年度後半は、「静岡の文化」や「茶の世界」で広がった縁を活かした企画を、授業とは関係なく開催する。また、“学問所”の企画として、ほぼ一年間に及ぶ大規模な公開連続講座「書物」も開催中である。このほか、夏前に大学前のカフェスナゲリーで開催した、学生・教員・職員・地域の人たちが気軽に交流できる“合コン”も思いのほか好評で、継続のリクエストも頂いている。

大学の組織として動かないと大学の成果にはならないし、いいかげんなことはできない。しかし、実は、ちょっとした思いつきや、日常的な人の繋がりが地域の人たちにとっての大学そのものになっていくし、最終的には、驚くような大きな成果をもたらすかもしれない。毎年の地域連携事業リストには掲載できないような小さな交流こそが、実は大学の地域連携を支えているのだ、という、至極当たり前のことを取って書いてみた。だから評価して欲しい、ということではない。ただ、同じように、“活動”などと思わずに動いている多くの人たちが、華々しい業績リストを作れないまま肩身の狭い思いをしないですむように、そういう活動を見かけたら声を掛け、出来れば一緒に参加して欲しいな、と。



〈さまざまな地域連携のかたち〉

情報学部地域連携推進室の活動について

情報学部 岡田 安功



情報学部地域連携推進室は、その設置規程において、ミッションを「地域連携推進室は、情報学部で行われる教育研究の成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与することを目的とする」と定められています。これは学校教育法83条2項が定める大学の使命を、情報学部においては地域連携推進室が中心になって担うことを表明したものです。

§1 これまでの実績

地域連携推進室は情報学部と地域社会が連携するための窓口としての役割を果たしています。現在、地域連携推進室の中心的な活動は平成20年度から静岡大学が取り組む「多角的社会連携による自己発見教育推進事業」です。この事業は平成20年度～23年度の4年計画のため、来年度が最終年度になりますが、事業年度の終了後も継続したいと考えています。情報学部は、これに該当する事業として、学生が社会貢献を通して自己発見をすることを目指しました。次に紹介する1から5の事業はいずれも学生の自己発見を促す事業として地域連携推進室は実施していますが、1、3、4は平成20年度当初から「多角的社会連携による自己発見教育推進事業」として位置づけられています。どの事業でも学生が地域社会に貢献することを通して自己発見という経験を深めています。

1 IT教育支援学生ボランティア活動

情報学部は9年前から、毎年、小中学校へボランティア学生を派遣してIT教育を支援しています。平成21年度は、小・中学校7校に前期と後期で延べ31人の学生を派遣し、各学校のIT教育を支援しました。今年度も昨年度とほぼ同数の学生がボランティアとして活躍しています。地域連携推進室はパソコンの使い方だけではなく情報モラルの指導にも配慮するように学生を指導しています。ボランティア学生は子供たちとの触れあいに満足するだけでなく、教えるという行為を通して自ら学び、人間としても成長しています。

2 IT講師補佐ボランティア活動

昨年度から、天竜川・浜名湖地区総合教育センターが主催する幼稚園及び小中学校の教員を対象とした教育工学研修会で、情報学部の学生が講師の補佐をして

います。これは前期だけの活動です。平成21年度は12名の学生が浜松市の教員にパソコンの使い方を教えました。今年度は15名の学生が応募しました。このボランティアでは、教え始める当初、教師を教えるということに学生たちは緊張を感じるようですが、すぐにリラックスして充実した時間を過ごしています。



3 公開講座『情報学アラカルト講座』の開講

毎年11月に、浜松キャンパスでテクノフェスタが開かれる日に、公開講座を開講しています。講義内容は情報学部の文工融合教育を一般の方がミニ体験できるように構成されています。したがって、講師の紹介や質疑応答を含めて90分の講座です。学生にこの講座の撮影と編集をさせて、自己発見の機会を提供しています。

今年度は11月13日（土）に「情報学アラカルト講座2010」を開講します。講師と講座のタイトルを紹介しましょう。

南 利明教授（法哲学）

「情報の機能について ～操作と管理～」

水野忠則教授（計算機科学）

「インターネット、モバイル、クラウド、そしてデジタル化社会へ」

湯浦克彦教授（社会情報システム）

「市民ネットワークシステムの展開～公共機関、企業、そして大学とのコミュニケーションの未来」

これらの講座は同時並行で開講され、受講料は500円です。詳細は、情報学部Webページ、その他広報を通してお伝えしています。

4 中小企業のHP作成支援活動

情報学部・浜松商工会議所・静岡文化芸術大学が連携して、ITコーディネーターの指導のもと、学生たちがそれぞれの特性を活かして中小企業のホームページの作成を支援しています。平成20年度は2社のホームページを制作し、平成21年度は3社のホームページを制作しました。学生で構成する一つのチームが一つの会社を担当するのですが、各チームは情報学部の学生と静岡文化芸術大学の学生の混成チームです。この活動は後期に行われ、参加する学生は3年生です。そのため、活動の後半は就職活動や期末試験と重なるのですが、学生たちは生き生きと活動しています。

5 浜松国際ピアノコンクール・ボランティア活動

3年に1度の浜松国際ピアノコンクールが平成21年11月に開かれました。学部生27名と大学院生7名がボランティアとしてコンクール取材して、インターネットで配信しました。配信期間中のダウンロード合計回数は約450万件でした。

§2 今後の飛躍をめざして

これまで地域連携推進室の事業は学生の自己発見教育を推進することが主眼でした。地域連携推進室は学生ボランティアを派遣してきましたが、学生が自己発見をするという教育的な観点から派遣してきました。したがって、例えば、ホームページの制作であっても、単なる業務行為で教育的契機のないものに対しては、申し出を断ってきました。しかし、最近は地域連携推進室が窓口となって地域と大学の連携の窓口としての機能を発揮するようになりました。また、情報学部の教員は研究や社会活動を通じて地域と密接な関係をもっているため、教員がどのように地域へ貢献しているのかを地域連携推進室がもっと情報発信しなければいけないと考えています。教員が地域へ貢献している割には、その活動が多くの人に知られていない現状を改める必要があります。教員が具体的にどのような地域貢献をしているかを発信することにより、地域による大学への需要が掘り起こされ、大学と地域との連携はますます深まると考えられます。ただし、教員の地域連携を情報発信し、地域連携を推進する際には、個々の教員に時間的負担をかけないように工夫したいと考えています。社会への研究教育の還元は大学の重要な課題ですが、そのために教員のエネルギーを不用意に消耗させるのは好ましくありません。コストをかけずに効果を最大限にする工夫をしたいと考えています。

地域連携推進室が窓口となった最近の地域連携とし

て、「浜松まちなかにぎわい協議会」との連携や「いきいき菜園」との連携があります。いずれも学生ボランティアを求められていますが、後者についてはまだ実績がありません。この「いきいき菜園」は浜松市が浜松市市民農園条例に基づいて設置する市民農園で、この農園取材してホームページの記事にするボランティアが、日本市民農園連合静岡県連絡会から募集されました。しかし、前者については学生が協議会に参加して意見を述べたり、「浜松まちなかにぎわい協議会」の事務局が学部の専門科目で講義をしたりして、情報学部の研究と教育が浜松中心市街地の再生に実践的に関わるようになりました。「浜松まちなかにぎわい協議会」の事務局は遠州鉄道、静岡銀行等の地元の有力企業と浜松市役所からの出向等によって構成されています。また、静岡大学は「浜松まちなかにぎわい協議会」の特別会員になっています。最近の学生はボランティア活動の実績が就職活動で有利になると自覚していて、故郷でもない他県へ出かけて夏休みにボランティア活動をする学生がいます。ボランティア活動に対する学生の意欲を情報学部の地域連携推進室が組織化できれば、情報学部の地域貢献はもっと進むと思います。

情報学部が発足して間もなく教育的観点から情報学部の地域連携活動が始まり、これは教育と研究の社会への還元になりましたが、今後は教員の研究の刺激になるような地域連携を実現したいと私は考えています。地域社会の大学に対する期待が研究成果の社会的還元である以上、大学の研究能力の向上は地域貢献に不可欠です。この意味で、前述の「浜松まちなかにぎわい協議会」との連携は教育と研究の両面で実践的な意味をもっており、今後の地域連携の試金石になると私は考えています。

大学が地域と密接に関わることは学校教育法の規定を待つまでもなく大学本来の社会的使命です。大学が様々なレベルで地域と多様に連携することにより、社会が活性化します。もちろん、民間企業や公的機関も地域へ貢献しますが、研究と教育が主要な任務である大学は地域に対して独自の貢献ができます。大学の地域貢献という言葉は比較的新しい言葉ですが、これが多忙化で苦しむ大学教員の新たな負担ではなく研究と教育の新たなスタイルになれば、より少ないコストでより大きな利益を生むことになり、大学の地域への貢献はますます高まるでしょう。

地域向けイベントのお知らせ（9月～12月）

■土曜進学相談会

日時：9月11日（土） 13：30～16：30

場所：静岡市産学交流会館6階

プレゼンテーションルーム

<http://www.shizuoka.ac.jp/nyuushi/campus/index5.html>

■教育学部音楽教育講座公開講座

日時：9月28日（火） 14：00～17：15

場所：教育学部E棟201教室

内容：国際的尺八演奏家 家田嶋 直士氏による演奏および講義

■理学部サイエンスカフェ in 静岡

日時：9月30日（木）18：00～19：30

10月14日（木）18：00～19：30

11月18日（木）18：00～19：30

12月16日（木）18：00～19：30

1月20日（木）18：00～19：30

場所：静岡市産学交流会館6階

プレゼンテーションルーム

（11月18日のみ大会議室）

17：30から「数学パズルコーナー」も開催

■静岡大学・コープしずおか連携講座

環境問題のウソ・ホント～自分の頭で考えよう～

日時：10月2日（土） 10：00～12：00

場所：静岡市産学交流会館6階

プレゼンテーションルーム

<http://www.lc.shizuoka.ac.jp/event00039.html>

■静岡大学開学60周年記念公開シンポジウムII

静岡大学の足跡と未来への足音

教育・福祉・地域づくり～よりよく生きるために～

日時：10月30日（土）13：30～16：30

場所：静岡市産学交流会館6階

プレゼンテーションルーム

<http://www.lc.shizuoka.ac.jp/event00032.html>

■アントレプレナー講演会

日時：11月11日（木）15：00～18：00

場所：静岡大学浜松キャンパス 佐鳴会館

■静大祭（浜松）、テクノフェスタ in 浜松

日時：11月13日（土）、14日（日）

場所：静岡大学浜松キャンパス

<http://shizudaisai.cside.com/>

■秋季オープンキャンパス（浜松）

日時：11月13日（土）

場所：静岡大学浜松キャンパス

■静大祭（静岡）

日時：11月19日（金）～21日（日）

場所：静岡大学静岡キャンパス

■秋季オープンキャンパス（静岡）

日時：11月20日（土）

場所：静岡大学静岡キャンパス

■浜松RAIN房講演会「ハヤブサの翼・イトカワの砂」

日時：11月23日（火）15：00～17：00

場所：オークラクトシティ浜松3階チエルシー

■静岡大学・コープしずおか連携講座

グリーンコンシューマーを目指して～地球環境も家計も守る～

日時：12月18日（土）10：00～12：00

場所：静岡市産学交流会館6階

プレゼンテーションルーム

■静岡大学開学60周年記念公開シンポジウムII

静岡大学の足跡と未来への足音

いま、再び〈いのち〉を考える

日時：12月18日（土）13：30～16：30

場所：静岡市産学交流会館6階

プレゼンテーションルーム

<http://www.lc.shizuoka.ac.jp/event00032.html>

編集後記

このようなニュースレターを作成するのは初めてで、原稿を作成するためのソフトウェアInDesignを使うのにも一苦労でした。今まで、一部署のことを紹介するニュースレターはあったと思いますが、複数の部署に渡る内容を紹介するのは、あまりなかったと思

います。本センターは地域と静岡大学を結ぶために設置されたセンターですので、できるだけ地域の方に静岡大学を身近に感じてもらえるよう、各部署でもあまり取り上げられない内容を取り上げていこうと考えています。（研究協力・情報チーム 森本 真弘）

発行日 2010年9月1日

発行 静岡大学地域連携協働センター

編集 森本 真弘（研究協力・情報チーム）

連絡先 〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学学術情報部研究協力・情報チーム

☎054-238-4902 E-mail: ochiiki@ipc.shizuoka.ac.jp

ウェブサイト <http://www.shizuoka.ac.jp/chiiki/>